Traveler of fate～魔光創世伝～

さばのみそに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｔｒａｖｅｌｅｒ　ｏｆ　ｆａｔｅ～魔光創世伝～

【Ｎコード】

Ｎ０２４９Ｊ

【作者名】

さばのみそに

【あらすじ】

世界の平和のために、世界の歪みを正すために少年少女たちが旅（ん？冒険？）をしながら成長する物語。なんのために、何を求め、何を掴めばよいのか。たまにドタバタ？基本超シリアス。「一寸先は闇」とはよくいったもの。

プロローグ

美しい弧を描いた天井に小さな光が拡散する。
その天井の下には妙な造りの大広間と清楚な身なりをした少女が一人。
少女は不安げな面持ちで、だがそれでいながらしっかりとした足取りで大広間の中央に足を踏み入れた。大広間の中央には宙に浮く円盤があり小さな光はそこから噴出していた。
部屋中にエメラルドグリーンの光が浮遊する中、少女は円盤の前で静かに立ち止まると、その物体に手をかざした。大きく深呼吸して意識を自身の手に集中させる。少女の眼差しに迷いはない。むしろその瞳には強い意思と決意の炎が宿っていた。

神秘的な、まるで夕陽のように麗しい髪を風になびかせながら少女は呟いた。

「魔術増幅光（シルヴァンティア）。お願い。暴走をやめて」

少女の言葉に呼応するように、円盤から光が溢れだし大広間は一瞬にして光に包まれた。
だが光は一筋の光となり、少女を吹き飛ばした。
吹き飛ばされても尚、少女の瞳から炎のような強い眼差しは消えない。

「お願いだから暴走をやめてッ！」

壁に叩きつけられながら光に向かって少女が叫ぶ。だがその声は届かない。
（ダメ・・・ここで私が諦めたら世界の歪みに拍車を掛けてしまう・

・・そんなの絶対ダメ）

少女は手首に光る紺碧のブレスレットを掲げ、そして静かにそれを光の中に投げ入れた。

運命の歯車が動き始めた。軋むようにゆっくりと・・・ゆっくりと

――――――――――

プロローグ　（後書き）

前回やっていた小説が何故が表示されず、いつの間にかデータが全て消えていたので新しく小説を始めました。
不束者ですが皆さんどうぞお付き合いよろしくお願いします。

The first story : 一寸先は闇

外は一面の銀世界に覆われていた。透き通るように白く、しんしんと地面に降り積もるそれはまるで雪のようだった。だがそれは雪ではない。空から降ってくるその白い物質を、ラミエル・オルヴィアはヴァローン城の南に面した日当たりの良い一室から見詰めていた。

ラミエルは肩程まである、夕陽を思わせる鮮やかなオレンジ色の髪を一つに結うと読んでいた本を閉じて城の医務室へと向かった。家具全て暖色でまとめられた清潔感溢れる私室から出る。

彼女、ラミエル・オルヴィアはヴァローン帝国唯一の姫君であった。そのためか、幼き頃から外出をした記憶がほとんどない。手厚く保護されているのはよいが、それは行き過ぎた愛情。好奇心旺盛な彼女にとってそれは束縛以外のなにものでもなかった。

自室の部屋から見ることができる景色は限られていた。空はあんなに広いのに、外はこんなにも自由に溢れているのに届かない。

ラミエルはどうにかして城の外のことを知りたかった。城の外では何にも縛られず、自由に生きることができる。きっといつの日かこの狭い世界から飛び出せる日がくると・・・。そう信じて１６年間生きてきた。

部屋を出ると今度は気が遠くなるほど長い廊下が待っていた。床は隅々まで磨かれていて気を抜けばその場で滑ってしまいそうな程であった。

廊下には何人かの城の兵士が立っていた。兵士の仕事は姫の護衛と

城の警備。それを担当するのは大抵、新兵の仕事であった。何かあれば城のどこにいても兵士が駆けつけてくる。

「姫、どこへ？」

聞き覚えのない少々低めの澄んだ声。横を見ると直立不動の姿勢のまま兵士が立っていた。ラミエルはその兵士と向き合う。

「はい。医務室へ」

笑顔で返答すると兵士は少々慌て気味で大丈夫ですか？と彼女の身を案じる。もちろんと言った面持ちで医務室へ進む。

先日、魔術増幅光（シルヴァンティア）がいきなり暴走した。城下街の機械が全て停止してしまい人々が城まで押し掛けてきたのだ。城の中央にはそれを制御する装置がある。だがそれを仕えるのは王族、オルヴィアの血を受け継ぐ者だけなのだ。

その暴走を抑えるために、ラミエルは立ち上がった。結局、暴走を止めることができなかったが一時的に抑えることには成功した。何もかも母の形見の光制輪（エルメティア）のおかげであるのだが・・・。

魔術増幅光（シルヴァンティア）とは空気中に存在する酸素に宇宙空間から降り注ぐ魔光（ヴァルト）が化合することでできる物質である。普通は目に見えないが濃度が高くなると肉眼でも見ることができる。

魔術増幅光（シルヴァンティア）は我々人間が生きるためには必要不可欠だ。世界中で今、魔術が生活の支えとなっている。近年、大人しかった魔物が凶暴化してきたため人々は魔術増幅光（シルヴァンティア）に頼らざるを得ないようになった。

廊下の角を曲がる。階段を下り、医務室が見えてきたところで一度立ち止まる。

（何故、急に魔術増幅光（シルヴァンティア）が暴走したのかしら・・・。徐々に魔光（ヴァルト）の濃度が高くなって、機械類がおかしくなったっていうならわかるのに・・・それに魔術増幅光（シルヴァンティア）が降り積もるなんてありえない）

一度考え込んでみたが考えてもしかたがないと思いラミエルは医務室のドアをノックした。ラミエルは案外サバサバしているのかもしれない。

美しい整った顔立ちの少女はそのまま吸い込まれるように医務室へと入っていった。

純白のカーテンが風になびいている。この一室は城のどこよりも空気が澄んでいる、とラミエルは思う。部屋の奥には白衣に身を包んだ老人―というにはまだ早いような容姿の医者―が立っていた。

「ウィルド、こんにちは」

ウィルドと呼ばれる医者は軽く頭を下げながら部屋の奥から包帯を取ってきた。

丁寧に、ゆっくりと本当に優しい手付きで先日受けた傷の手当てをしてくれる。ほとんど言葉は交わさなくてもウィルドの考えはわかっていた。無理はしないでほしい、ただそれだけだろう。

「外傷は見た限り深くありません。打撲と切り傷だけですがしばらく安静にしていてくださいね」

その言葉にラミエルは頷く。

ウィルドは１０年以上自分の世話をしてくれた医者だ。肉体的な面

でも、精神的な面でもいつも助けてくれた。友達がいなかったラミエルにとっていつも話し相手はウィルドであった。
まるで本当の祖父のように振舞ってくれたこともあった。それがラミエルにとって心の支えとなっていた。真正面から自分を受け止めてくれるウィルド。ウィルドのおかげで人に優しく接することの大切さを学べた。ラミエルの尊敬する人物の一人である。

自室に戻ろうとしたとき、何やら兵士たちが集う談話室が騒がしいことに気付いた。

（何かあったのかしら・・・？）

兵士たちのそばに寄ろうとしたとき、階段の下から叫び声が聞こえた。
思わず廊下の柱の陰に隠れてしまった。

「侵入者だッ！全員配置につけ！姫様を早く安全なところへッ！」

兵士たちの顔色が変わるのが遠目から見てもわかった。
（ここにいたら皆に迷惑がかかるッ）
兵士たちに誘導される前にラミエルは自室へと駆けて行った。

部屋の前で立ち止まる。後方に気配・・・否、殺気を感じたからだ。
後ろを振り返ると一人の青年が一本の剣を握り立っていた。
青年の後ろには城の兵士が倒れていた。

（まさか・・・皆を倒したっていうの？そんな・・・一体、どれだけの数を・・・）

静寂が辺りを包んだ。
窓の外では魔術増幅光（シルヴァンティア）が降り積もっていた。

The second story : 足下の明るいうち

「あんた誰だ？」

痛い程の静寂を先に破ったのは城に侵入してきた青年だった。
コバルトブルーの長い髪を風に揺らし、手には素人目から見てもそこらの軍刀とは比べ物にならないほどの上等な刀を握っていた。
一瞬感じた青年の殺気が嘘の様に今は柔和な瞳をしている。

「あなたこそどなたですか？後ろの兵士の方たちは・・・」

ラミエルは普通に青年と会話をしようと試みる。侵入者と対談とは・・・世間知らずといえばよいのか、度胸があるといえばよいのか・・・。
兵士たちは皆、怪我をしているようには見えない。なんせ鎧に身を包んでいるのだから。峰打ちかあるいは・・・。

「気絶してもらっただけだ。俺はあんたに用があるんじゃない。ウィルドという男に用があってここまで来た。その男の居場所を知っていたら案内してほしい」

静かに、だがはっきりと青年はそう言った。
「え？ウィルドに？」

青年の強い瞳がラミエルをとらえた。
だが話がおかしい。普通ならばどんな身分の者でも城内の者に用があるのなら正面玄関で面談が許されている。だが青年は正面玄関を突破しここまで来た。一体何故・・・。
青年があたりを気にし始めた。

後方から足音が近づいてくる。音は一つ。ラミエルが振り向くとそこには長身の男が立っていた。

「何をしてるんだッ！アルス・リベリオンッ！なんのためにこんな騒ぎを起こしたッ」

怒号が廊下いっぱいに響いた。男が叫ぶとすぐさまラミエルを守るように彼女の前に出た。
男は細身で長身。だがしっかりと筋肉は付いているのが服の上からでもわかった。髪はさっぱりとした茶髪。前に立っている青年とは少々雰囲気が違う様に感じる。

（アルス・リベリオン？どこかで聞いたことがあるような・・・）

アルスと呼ばれた青年の表情が曇った。
ラミエルが前に立った男を見据える。この声には聞き覚えがあった。先刻、医務室に行く途中に声を掛けてきた兵士だ。見た目は自分より３つ４つは年上だろう。だが声のせいか見た目より大人びて見えた。
状況を把握しきれないままラミエルは青年二人の顔を交互に見た。

「敵を討ちに来たんだ・・・。俺はここの連中がもう誰一人信用できない。だから自分が信じた道を行くッ。俺は魔物（シード）退治をやめてきた。浄階の称号もいらない。残ってるのは復讐心だけだ！」

苦痛に満ちた表情で青年が吐き捨てるように言った。男は不可解そうな表情で青年を見詰める。
ラミエルは青年の顔をもう一度見た。ウィルドのことを何故知っているのか疑問だったが今は何も口出しすることができずにいた。

（思い出したッ！アルス・リベリオン・・・魔物（シード）退治の最高責任者ッ。こんなに若い男の子だったなんて・・・。でも何故この人がここに・・・）

気絶していた兵士たちが起き上がり始めた。それに気付いてかアルスは小さく舌打ちをし、そこを通せと言わんばかりの目でラミエルに訴えかけてきた。
ラミエルは意を決したかのようにアルスの元に駆け寄った。驚いたようにアルスが一歩遠退く。

「事情はわかりませんが一先ず私についてきて下さい。お城の兵士の方に捕まれば今すぐにでも牢屋に入れられてしまいます・・・。人に見つかりにくい場所を知ってるんですッ。そこなら・・・」

「俺を匿うってのか？」

ラミエルが小さくはい、と返事をする。
アルスはラミエルの言葉を聞いて一瞬躊躇ったが小さく頷いた。

「姫！私も連れて行って下さい。申し遅れました、新しく城の衛兵として採用されたメルヴィン・カノンと申します」

男は深く頭を下げた。
「もちろんです」
微笑みながらラミエルは返答した。

◆

城の中は依然として騒がしかった。
ラミエルは青年アルスとそしてアルスと知り合いらしい城の兵士、メルヴィン・カノンとヴァローン城地下にある武器庫へと走りながら向かっていた。抜け道という抜け道を使い、おかげで誰にも見つかることなく武器庫に辿り着いた。
この場所を自由に出入りできるのは数人の上官だけであった。だがその上官たちも凶暴化した魔物討伐のために今は全員遠出中である。
滅多に走る機会などないラミエルは息を切らせながら武器庫の大きな扉を閉めた。
メルヴィンも少し息を切らせていたが、アルスは汗の一つもかいていなかった。

「なんで急に匿ってくれる気になったんだ？」

唐突にアルスは言った。床を見詰め、ラミエルの顔は見ない。

「ウィルドを知っている人だったから・・・です」

アルスが弾かれるように顔をあげた。その顔は憎しみに溢れていた。

「その男は今どこにいるッ！」

ラミエルに凄んでくる。メルヴィンが威厳のある声で
「落ち着け」
と、アルスを静めた。
埃っぽい武器庫がしんと静まった。アルスは嘆息をもらした。

「そうだな。すまない。俺は礼を言わなければいけない立場だったな。どこの誰だか知らないが助かった・・・。あのままあそこにいたら多分、逃げ切れたとは思うけど下手したら牢屋にぶち込まれてた。迷惑掛けたな。」

ラミエルがいいえ、と首を振る。

「とにかく・・・もしよければ事情を話してくれませんか？私はラミエル・オルヴィアと申します」

１６歳とは思えないほど少々幼い、愛嬌のある表情でラミエルは言った。

メルヴィンも事情が聞きたいと言わんばかりの表情だ。

今度はアルスが小さく首を振った。

「悪いが詳しい事情は話せない。これは私情だ。あんたにこれ以上迷惑は掛けられないからな」

皮肉っぽい笑みでアルスは微笑んだ。

「・・・それに」

アルスは小さく呟きながらメルヴィンを見た。メルヴィンもアルスを見る。

アルスが言葉を続ける前に今度はメルヴィンが口を開いた。

「何で魔物（シード）退治をやめた。お前がいなければあの組織は成り立たないだろう」

メルヴィンがそう言うとアルスは嘲笑（ちょうしょう）した。

「組織も何も、人がいないんじゃあんなの何の役にも立たない」
メルヴィンが首を傾げた。
どういうことですか？とラミエルがアルスに訊ねる。
「皆死んだ・・・事故で、いや殺されたんだ」
「殺されたってそんなッ！」
ラミエルは思わず身を乗り出すように叫んでいた。
魔物退治、通称シードと呼ばれる組織の構成員はほとんどが満２０歳に満たない少年少女たちだ。理由は大人より子供の方が魔術増幅（シルヴァンティア）光との同調率（シンクロ）が高いからだ。子供が魔術増幅光（シルヴァンティア）を武器として使うと通常の何倍もの威力を発する。
これまで何度も魔物（シード）退治は人々を支えてきた。組員は１００人以上。魔術（シード）退治は世界中から選抜された戦闘能力が長けている子供しかなれない。
「今残ってるのは俺だけだ。後は皆・・・」
アルスは言葉をくもらせた。アルスの気持ちを思うとラミエルは胸が痛んだ。
メルヴィンも悲しみに満ちた表情でアルスを見詰めていた。
「アルス・・・だからって何故こんなところまで来た？敵討ちと言っていたな。どういうことだ？」
少し間があって、アルスは拳を強く握りしめた。

「事故のあと・・・ウィルド・ダルシアン、あいつが魔術で魔術増幅光（シルヴァンティア）を暴走させて組員が使っていた武器を暴発させたと任務先だった街の住民から聞いた」

アルスの長い髪の毛のせいで本人の表情が窺（うかが）えない。
怒っているのか、悲しんでいるのか、おそらく後者。ラミエルは心の中でその事実を強く否定していた。
（そんなわけないッ！だって・・・ウィルドは魔術がつかえないんだもの・・・）

「それは間違いないのか？」
メルヴィンが念を押すように問う。
「人に聞いた話だからな、間違いないとは言えない」
拳に力を入れたままアルスは呟いた。そうか、とメルヴィンは付け足す。

その言葉を聞いてラミエルは少しほっとした。
ラミエルはどうにかしてこの話しを終わりにしたかった。
二人の苦痛の表情を見たくない・・・そしてこれ以上ウィルドを疑ってほしくないという思いが交差していた。

「そういえば二人は知り合いなんですか？」
切り出したのはラミエル。無理に明るい口調で言って見せた。

「はい、アルスとは幼馴染ですから」
と、メルヴィンが言った。どうやら話をそらせることに成功したようだ。耐えがたい緊迫感から解放される。それに安堵したが同時にラミエルは驚いた。どう見てもメルヴィンとアルスには歳の差があるように感じられた。少なくとも3、４歳はメルヴィンの方が歳がいっているように見える。まぁ幼馴染が同じ歳とは限らないのだが・

・・・。

「あの・・・失礼ですがおいくつですか？」
おそるおそるラミエルは二人の表情を窺いつつ訊ねる。

「俺は１７だ」
アルスがそう言うと
「私も１７です」
と、メルヴィンは照れくさそうに言った。

驚いた。まさか二人とも同年齢だったとは・・・。

しばらく沈黙が続き、ラミエルは考え込んでいた。
（それにしても、魔術増幅光（シルヴァンティア）が暴走して魔物退治（シード）がなくなっていたなんて・・・。私が城の外に行って各地の魔術増幅光（シルヴァンティア）を安定させることができれば・・・）

座っていたアルスが急に立ち上がった。
「そろそろ行く。世話になった」
武器庫から出ようとする。

――――――この人は城の外から来た。外には自分の知らないものがたくさんある・・・。この人は自由なんだろうか。私はこのままでいいんだろうか。きっと城の外ではたくさんの人たちが暴走した魔術増幅光（シルヴァンティア）に苦しめられている。こんなちっぽけなちからしかないけど・・・助けたい。一人でもいい。手が届く限り私は人々を助けたい。傲慢かもしれない・・・けどッ！

「待ってくださいッ！」

ラミエルの髪が揺れた。

アルスは立ち止まり振り返って真っ直ぐにラミエルを見据える。

「私も連れて行って下さい」

The third story : 目は心の鏡

「私も連れて行って下さい」

毎日が、窮屈だった。まるで籠の中の鳥のように・・・。
不自由したことなんて一度もなかった。そして自由だった時も一度もなかった。
一人で駆け回って怪我をしたこともなかった。
お父様は私が生まれてすぐ亡くなって、お母様も私が5歳になる前にこの世から去ってしまった。
私は何もできなくて。ただ空を自由に飛び回る鳥たちが憎かった。
真っ白な翼をいっぱいに広げて、風に乗って大空を舞う。
どんなに気持ちいいんだろう。私はそれをただ窓から見詰めることしかできない。
城の外から子供の笑い声が聞こえてくる。子供たちが元気に遊んでいる。手を伸ばしても届かない。私も混ぜて、私と遊んで・・・寂しいよ。勉強することで気が紛れた。友達と言えば勉強道具くらいだった。
「初めまして、ラミエル様。今日からこのお城の専属の医者になったウィルド・ダルシアンです」
愛想良く握手を求めてくる中年のウィルドと名乗る男。どうしても

心が開けなくて無理やり笑顔をつくるだけでその場は終わった。
夜が嫌いだった。手を伸ばしてもあるのは暗闇だけ。広すぎるベッドが、広すぎる部屋が静かすぎてこわかった。そんなとき廊下から光がさしてきた。人が部屋に入ってくる。温かいココアを持って、天使のように真っ白な服を着て私が安心できるようにずっとそばにいてくれた。それがウィルド。

「あなたが笑えば、私も笑います」

くすぐったかった。心の雪解け。ウィルドは温かい心を私にくれた。素直に笑う大切さを思い出した。寂しさはウィルドが紛らわせてくれた。でも窮屈さまではなくならなかった。城のどこに行っても誰かに監視されている感覚。嫌だった。

城の外には何があるの？こんなちっぽけな私にできることはない？馬鹿みたいに笑って、騒いで眠ることができる？嫌なことがあったらそれを全部忘れさせてくれるような楽しいことがある？

私は自分のこの目でみて、世界を実感したい。たくさんの人に出会ってみたい。
お願い神様。私に空を自由に飛べるような翼を下さい。

「正気ですか！？一国の姫君が城の外に出て行くなど許されませんよッ！」

メルヴィンが驚愕の表情でこちらを見詰めている。無論、アルスも。どうしても自分の目で世界を見たい。その一心。

「私の気持ちは変わりませんッ！それに各地で魔術増幅光（シルヴァンティア）が暴走している原因を調べなくてはなりません。暴走を止めるのは私の仕事です。行かせてメルヴィン！」

武器庫にラミエルの声が響く。祈るように手を胸の前で組む。城の外は危険だって知っている。魔物だって、盗賊だってなんだっている。それを全部ひっくるめて私はなにもかも受け止めたい。

ラミエルが視線を上げるとそこには手が差し伸べられていた。

「一緒に来るか？」

それは皮肉めいた笑みなんかじゃなくて、まるで太陽のように包み込むような優しい笑顔。手を添える。とても温かかった。アルスは何も聞かない。ただ、手を差し伸べるだけ。笑うと女の子のように柔らかい顔になる。さらりと伸びたクセのない長髪が美しくもある。

「姫、わかりました・・・ですが私は城に残ります。城のことは私がどうにかしてみます」

力強くメルヴィンは言った。

「ありがとうメルヴィンッ！」

城のことはメルヴィンがなんとかしてくれるそうだ。

話しあった結果ラミエルが各地の魔術増幅光（シルヴァンティア）を安定させるまでは行方不明、ということになった。条件としては公に名前を出さないということだけだ。

「アルス、姫様に怪我させたらただじゃおかないぞッ！しっかり守れよッ！」
「へいへいわかってるよ」
「私、アルスさんに迷惑はかけませんッ」

メルヴィンとアルスが顔を見合わせる。二人が同時に笑った。よくわからないがラミエルもつられて笑う。城の外に行けるうれしさでもう胸がいっぱいだ。だけどこれは遊びじゃない。魔術増幅光（シルヴァンティア）を安定させればまたこの城に戻ってこなければならない。

「詳しい話はあとだ。客がきたぜ」
「え？」

アルスが鞘から剣を抜きとる。とても鋭い、光り輝く剣。思わず見入ってしまうほどの。ラミエルは武器庫の扉の向こうから城の兵士たちが近づいてくる足音を聞いた。アルスは腰に掛けていたフード付きの服をラミエルに被せた。服は予想以上に大きく、ラミエルの身体を全て包んでしまった。引きずるほど長い。

「え！？アルスさんどうするんですか！？」
「姫様、武器庫の入り口はここだけですか？」

足音が扉に確実に近づいてくる。

「ウィルド・ダルシアンのことはまだ気になるが、今はとにかく外へ出ることが先決だ。でもまた城の兵士一人一人片付けるのは面倒だな・・・仕方ない。ラミエル、ちょっとここの武器庫壊すぞ」
天井を見上げながらそう言ったアルスの表情はとても幼く見えた。

ラミエルが口を開く前にアルスは頭上に手を掲げた。その動作はまるで自分が魔術増幅光（ラミエル）（シルヴァンティア）が暴走した時にやったような・・・。
一瞬、アルスの胸元が光った。見るとアルスの首にかかっているペンダントの中に固体の魔術増幅石（シルヴァンティアル）があった。ラミエルでさえそれを実際にみるのは初めてであった。美しく輝くそれは突如、目映い光を放った。目がくらむ。

「ディヴァイングロウス」

アルスがそう呟いたのを薄れる意識の中聞いた。
ラミエルは初めて真っ白な光に包まれながら気を失った。

◆

気がつくと草の上で眠っていた。広い、そして透き通るような空と雲が視界いっぱいに広がる。暖かい太陽の光が降り注ぐ。横を向くとてんとう虫が葉っぱの上をチロチロと歩いていた。身体を起こして辺りを見回すと一本の大きな木があった。目を凝らすとその木の枝の上にはアルスがいた。長い髪の毛を一つに縛っている。眠っているようにもみえる。
木のそばまで歩み寄ると木の上から声が降ってくる。

「良かった気付いたのか。悪いな、配慮が足りなかった。魔術増幅石（シルバンティアル）の気にあてられたんだ」
アルスは木の上から飛び降りるとラミエルの肩に手を置いた。至近距離で顔を見詰められてラミエルは自分の顔が火照っていることに気付いた。考えてみればラミエルは同じくらいの年頃の異性とまともに話などしたことがなかった。

「あ・・・あのッ」
「ごめん。ちょっと」

ふらり、と身体が傾きアルスは頭を抱えた。貧血だろうか。気のせいか顔色も少し悪いような・・・。肩に手を置いたのはふらついたからだとラミエルは瞬時に悟った。勘違いしてしまい、余計に顔が火照る。だが顔を強く振って、しっかりとアルスの身体を支えてやる。

「どうしたんですか？」

アルスはこめかみを押さえながら呟いた。
「移動魔術は身体にかなり負担をかけるんだ。人を2人移動させただけでがたがくるなんて参っちまうな」

ラミエルはその言葉に驚いた。高等魔術の移動魔術を習得するには最低でも30年以上はかかると聞いている。それなのにこの青年はこの歳で遣って退けているというのか。この歳で魔物（シード）退治の最高責任者だったという事実にも頷ける。
おそらく、アルスは木の上で眠っていたのではなく木の上から動けなかったのだろう。そう思うと急にラミエルは申し訳ない気分になった。

「あの、ごめんなさい・・・私のせいで」

クスッとアルスが笑った。頭をくしゃくしゃと撫でられる。
「謝らなくていいんだよ」

とても照れくさかった。自分より大きな手が頭から離れる。

「多分、あの城であんたに出会っていなかったらウィルド・ダルシアンを見つけ出して殺していた。あのときはもうなんつーか無我夢中っていうか、前しか見えてなくて感情丸出しだったからな、恥ずかしいったりゃありゃしねえ」

少々自嘲気味にアルスは言う。おそらく、いや確実に彼はまだ人を殺したことがない。時々見え隠れする優しい瞳がそれを物語っていた。

「私もアルスさんにあのとき会っていなかったら今、ここにいることができませんでした。お城の外はこんなに広かったんですね」

目を閉じて身体いっぱいに風を浴びる。鳥になったような気分だった。

（もう・・・籠の中じゃないのね）

どこまでも続く草原に感慨を覚えながら新鮮な空気を吸い込む。

「で、これからどうする？俺は姫様を守れッ！ってメルヴィンに言われちまったしな」

笑いながらアルスはメルヴィンの真似をする。

「私は城の外のことをまったく知らないのでアルスさんについていきます」

力強くそう言うとまたアルスは笑った。だけどその笑いには何故か影がある。当たり前だろう。仲間（シード）が皆死んでしまった・・・いや、殺されてしまったのだから。

「わかった。じゃあまずはあんたのその形(ナリ)どうにかしなくちゃな。その格好じゃ、私は王女ですって自分から言ってるようなもんだ」

アルスはラミエルの高貴な服を指さしながら言う。

（そんなにわかりやすい格好をしてたのかしら・・・）

まだ足下がふらつくアルスを軽く支えながらラミエルは歩きだした。

「わぁッ！きれい！」

しばらく歩くと海が見えてきた。こんなに間近で海を眺めたのは生まれて初めてだった。その海はアルスの髪とまったく同じ色をしていた。水面に反射する太陽の光があまりに神秘的で心惹かれた。

おそらく随分遠くまで移動したのだろう。この地では魔術増幅光(シルヴァンティア)が肉眼で確認することができない。魔光(ヴァルト)の濃度がかなり低い土地だということがわかる。

「ここでは魔術増幅光(シルヴァンティア)が肉眼では見えませんね」

「ヴァローン帝国はかなり魔光(ヴァルト)の濃度が濃いからな。魔術増幅光(シルヴァンティア)の気にあてられて病気になるやつも少なくない」

ラミエルは耳を疑った。

（魔術増幅光(シルヴァンティア)のせいで病気になるの！？）

「そんな！魔術増幅光(シルヴァンティア)は武器や機械に影響を与えるだけじゃないんですか！？」

アルスは首を振る。

「機械だけじゃない。人間だって、もちろん動植物も影響を受ける対象だ。魔物がいい例だ」

「そんな・・・」

魔術増幅光（シルヴァンティア）がそんなに危険なものだったとは知らなかった。悲しみと焦りが入り混じる複雑な思いがラミエルを苦しめる。

（はやく世界の魔術増幅光（シルヴァンティア）を安定させないと・・・ぐずぐずしてられない）

港町が見えてきた頃、アルスが急に立ち止まった。アルスを支えていたラミエルがよろける。見ると、アルスはペンダントを手に持っていた。間近で見るとそれは薄暗い武器庫でみたときの何倍も美しく見えた。

「俺のこの魔術増幅石（シルヴァンティアル）は一歩使い方を間違えれば全部術者に跳ね返ってくるようになってる。特殊技術で作られたモノだから詳しくは俺もよくわからないが・・・気をつけることに越したことはない。まぁ魔術増幅光（シルヴァンティア）の何倍も使い勝手がいくから便利だけどなッ」

大人っぽい表情で笑う。ころころと表情を変えてなんだか掴みきれない青年だ、とラミエルは思う。でも心の中は優しさに満ちていることは確かだ。

活気溢れる港町に着いた。そこには見たこともない魚介類ばかりが店に並んでいた。そして所々に服が売っている。どの服もとても動きやすそうだ。

「ここが海の町、マルティネスだ」

よたよたとぎこちない足どりで歩きながらアルスは言った。
ラミエルは初めて見る景色に胸が高鳴った――――――――――。

The third story : 目は心の鏡（後書き）

どうもおはようございます、こんにちは、こんばんは！作者です。
女の子視点がこんなにも難しいとは思ってもいませんでした。
あぁ・・・上手く表現したいッ！
誰か拙者にネーミングセンスをわけてください＾＾
それでは！読んで下さりありがとうございましたッ
少しでも楽しんでいただけていたら幸いでっす！

以上！小説は基本眠い時以外書かないさばのみそにでした～。

The fourth story : 世は相持ち

胸の高鳴りを抑えきれないまま視界を巡らせればあちらこちらに露店が立ち並んでいる。城の中では、たくさんの書物を読んでいたが百聞は一見に如かず。一つ一つの景色をしっかりと記憶する。賑やかな表通りを抜けると今度は小さな住宅街があった。賑わっている表通りとは裏腹に住宅地はまるで水を打ったように静まりかえっている。ラミエルは物珍しそうに辺りを見回しながら立ち止まる。

「何でこんなに静かなんでしょう？」

「そりゃあ皆自分の店で商売してるからだろ？もう俺、表通り（あそこ）に行く元気ない」

アルスは首をさすりながら小さな溜息をつく。

そう言うのも無理はない。アルスがこの町に入った瞬間、町の者たちが一斉に彼の元へ押し寄せてきたのだ。アルスは何年か前この近辺の海で悪さをし続けていた魔物を退治したらしい。しかも礼金なしでだ。町の人たちはアルスを英雄と称え、崇めた。

それ以来この町へ顔を出せば拒否しても無理やり金品を押しつけられたり、群衆に取り囲まれ身動きが取れなくなるといった有様だ。

歩きながらアルスは呟く。

「マルティネスの人たちは善良だし、友好的で馴染みやすいんだけどどうもこう・・・」

アルスは大抵、批判的なことを言うときは語尾を濁(にご)す。

そしてその後は決まって空を仰ぐ。何を思いながらあの広々とした空を眺めているのだろう・・・。ラミエルは心地良い潮風にオレンジの髪をなびかせながら前を歩くアルスを追う。

◆

城の中が生活のすべてだったラミエルにとって城の外はまったくの別世界。
今晩の宿を探すにも一苦労だ。地理が苦手なラミエルはこの町の中で何度も迷子になりかけた。ラミエルは幼いころから好奇心旺盛なため珍しいものがあればその場で立ち止まり何分も、何時間も観察する。アルスはそれを気にせず町の奥へ奥へと進んでいくため、いつの間にかラミエルは一人になっている。それの繰り返しだ。

・・・気付けば辺りはもう真っ暗になっていた。道の所々にある小さな灯りだけが頼りだ。時折遠くから聞こえてくる波の音が心を落ち着かせる。

細い裏道を歩いていくとやっと宿屋が見つかった。歩きまわってもうくたくたである。

「今夜はここに泊まるか」
宿屋の小さな看板をアルスは見上げる。ラミエルは笑顔で頷いた。かなり体力を酷使してしまった。

扉を開けるとチリン、と可愛らしい鈴の音が響いた。受付にはアルスのように美しい長髪がさらりと伸びた若い女性が立っていた。女性はこちらに背中を向け作業をしながらいらっしゃい、とだけ言った。無言の客に違和感を感じたのか軽くこちらを振り向くといきなり表情が輝いた。まるで猫のように上目遣いをしながら愛想の良い態度をとる。

「あら！いらっしゃい！アルスまた来てくれたのね！嬉しいわ！」
ラミエルは吃驚(きっきょう)した。
この宿を探すのに軽く3時間は費やした。だが、アルスは前にもここへ来たことが？
「よッ。元気にしてた？」
「もちろんよ。あんたのおかげでがっぽり儲かってるわ」
笑いながら会話をする二人の間にラミエルは割って入った。
「ちょっ、ちょっと待ってくださいアルスさん！アルスさんはここの宿の場所知ってたんですか！？」
「え？知ってたけど？」
当たり前じゃないか、といった表情だ。
「だってラミエル、町の見物楽しんでたから邪魔できなかったしな。もしかして怒ってる？」
まったく悪気のない表情で問うてくる。怒ってはないが複雑な気持ちではある。
「怒ってませんッ！」
思わず大声を出してしまい、口を両手で覆う。恥ずかしさに顔が紅潮する。
その姿を見て受付の女は笑う。そしてまた視線をアルスに戻した。
「アルス、今日は安くしといてあげる。可愛らしいお嬢さんも一緒

だしね」

そう言うと女はニコッ、と満面の笑みをラミエルに見せた。茶髪の長髪が滑らかに揺れた。

アルスは気を遣い、当たり前と言えば当たり前だが部屋を二部屋とってくれた。年頃の異性が同部屋など考えただけでラミエルは血圧が上がる。鍵を受け取りながら先に部屋へ行こうとするアルスの服の袖を引っ張った。そして振り返ったアルスを強引に受付から見えない柱の影に連れ込んだ。

「なッ！どうしたんだよ！」

「あの人アルスさんのなんなんですか！？」

そう言って後悔した。言い方を間違えてしまった。本当は「あの人はアルスさんの知り合いなんですよね」とただ聞こうとしただけなのだが、勢い余っておかしな言い方をしてしまった。これではまるで仲の良い二人に嫉妬しているようではないか・・。その事実も否定できないのだが・・・。

「え？俺じゃなくてあの人はメルヴィンの姉さんだよ」

「へ？」

間抜けな声が出た。

折角、受付から見えない場所までアルスを引っ張ってきたというのに受付に丸聞こえだったようだ。クスクスと受付の方から笑い声が聞こえてきた。アルスはとても不思議そうな顔をしている。道理で親しいわけだ。幼馴染の姉なのだから無条件で仲が良いのだろう。それを勘違いしてしまい顔がさっき以上に紅潮した。

顔を手で覆っていると受付から元気な声が響いてきた。

「事情はメルヴィンから聞いてるから大丈夫よ。今日はあなたたち以外お客さんいないの！だから今晩だけは自由に使っていいわよ。ゆっくり身体休めて行きな」

ラミエルは慌てて柱の影から出て頭を深く下げた。

その様子をアルスは黙って見守っていた。

受付に立っていた女は身軽に長テーブルの上を跨いでこちらへ寄ってくる。そして床に跪(ひざまず)いた。

「私は、ヴァローン帝国のヴァローン城に仕えさせていただいているメルヴィンの姉のディモール・カノンです。どうぞお寛(くつろ)ぎ下さいラミエル様」

頭をあげてください、とラミエルは手を振った。

「随分、俺と態度が違うんでないかい？ディモール」

少々、不服そうな・・・だが冗談めいた表情でアルスはこちらを見ていた。

モディールはペロっと舌を出して、「あんたとは違うのッ」と笑って言った。

話を聞くとモディールは故郷を離れ、この町へ移住してきたそうだ。理由は金儲け。メルヴィンとディモールの母親は魔術増幅光(シルヴァンティア)によって重い病に侵されているのだ。それの治療に莫大な金が必要とのこと。アルスは何度も金を渡そうとしたのだが全部二人は受け取らなかった。やはり自分たちの問題は自分たちで解決したいのだろう。

アルスもそれは納得しているそうだ。

ラミエルはすごいと思った。そんな大人のような行動はまだ自分に

はできないからだ。

赤いカーペットの階段を上がりながらラミエルとアルスは顔を見合わせる。

「そう言えば今日はなんだかんだで服買えなかったな」

アルスがラミエルの服を見詰める。身元を隠すために今日は一日中アルスの大きなローブを着ていた。これは城から脱出するときにアルスが自分に被せたものだ。とても着心地が良い。

「そうですね。明日は買わないと・・・ですね」

アルスは小さく頷きながら階段の手すりに手をかけた。

それぞれ別々の部屋に入る。暖色でまとめられた室内は城の私室を思い出させた。城の部屋より遥かに小さな部屋だがとても安心する。天井が手を伸ばせば届きそうである。

「ウィルド・・・元気にしてるかしら・・・」

小さく呟く。昨日の今日だが内心心配してしまう。

急に城からいなくなってしかも行方不明となれば今頃大騒ぎしているだろう。城に侵入者が入ってただでさえ大騒ぎをしたというのに・・・。

（私って自分勝手ね・・・）

大きなローブをハンガーに掛けて背伸びをする。そしてゆっくりとベッドへ腰かけた。

それにしても何故何年もヴァローン城の外に出ていないウィルドが人殺しと勘違いされたのだろうか。妙に引っかかる。ウィルドに関係があるものといえばなんだろうか・・・。医者・・・？

（あ、そういえば城の者がウィルドは研究をしてるって言ってたわね・・・何の研究をしてるんだったかしら・・・）

記憶を掘り起こす。

（確か・・・一つじゃない・・・。一つは魔術増幅光（シルヴァンティア）と魔術増幅石（シルヴァンティアル）。そしてもう一つはなんだったかしら・・・。）

考え込んでいるとコンコンとノック音がドアから聞こえた。

弾かれるように立ち上がった。

（アルスさん！？）

駆け足でドアを開くとそこにはスレンダーな身体つきの女性が立っていた。

「はぁい♪」

手にはコップが握られていた。ココアだ。彼女が作って持ってきてくれたのだ。よかったら飲んで、とラミエルに手渡す。飲むと美味しかった。そして全部飲み干すと身体の疲れのせいかいきなり眠くなった。

とろん、と意識が遠くなり始めた瞬間いきなり室内に気配を感じた。息を殺してベッドから身体を起こす。そして太ももに隠していた短剣を構えた。誰もいないが明らかに気配がある・・・。キシッと天井から物音が聞こえた。驚いて上を見上げるとそこにはねっとりと液体のような姿をした緑色の魔物がいた。目玉をぎょろつかせ、こちらをじっと見つめている。身震いする。城で武術や剣術の稽古はやったことはあるが本物の魔物相手に戦ったことなど一度もない。

いきなり魔物が天井から離れた。そして一直線にラミエルの手めが

け飛ぶ。
「きゃあッ！」
短剣が液体に触れた瞬間、キンッ軽快な金属音をたてて折れた。
「いやッ！こないで！」
液体だが表面は恐ろしい程に鋭利だ。触れたら怪我ではすまないだろう。ラミエルは後ずさった。そして壁まで追いつめられてしまった。魔物がこちらに飛ぼうとしている。
（もうだめッ）
目をつぶって身体を縮めると、バンッと遠くで扉が開く音がした。そして鈍い音がした。ビチャッと液状のものが飛び散る音。そして見上げるとそこには・・・
「こんな平和な町にも魔物が・・・。もうどこにいても油断できないな」
剣についた液体を振りはらいながらアルスは呟いた。
「怪我ないか？」
手を伸ばしてくる。ラミエルはその手に支えられながら立ち上がった。
まだ身体の震えは止まらない。そして目の奥がキリッ、と熱くなったかと思うと何かが溢れた。
「アルスさ・・・ごめんなさい。ごめんなさい。私・・・足手まといに・・・」
口からでるのは謝罪の言葉のみ。そして目からは止め処なく涙が溢れた。

それは自分の非力さ故。誰のせいでもなく自分のせいなのだ。
また優しくアルスは頭を撫でてきた。
「そう思うなら強くなればいいだけだ」
それだけ言うと彼は剣を鞘へ収めた。それが厳しさなのか、優しさなのか、ラミエルには正直言ってわからない。おそらく強くなれ、とは腕力や筋力の話でない。精神面だろう。だけど強くならなければならないことには変わりない。泣いても、謝ってもなんの解決にもなりはしない。
しばらくすると足音が近づいてきた。
「どうしたの！？すごい音したけど！？」
事情はラミエルに代わってアルスがディモールにした。
そしてその話を聞いてディモールはすぐにラミエルのそばに駆け寄った。怪我がないか心配してくれた。それが悲しくもあり、嬉しくもあった。
自分は弱い立場なのだということを認めざるを得なかった。
散乱した部屋を片付けながらラミエルは手を止めた。
「ねぇ、アルスさん」
「なんだ？」
一緒に部屋の片づけを手伝っていたアルスの手も止まる。
「私強くなります。そして私、アルスさんの役に立ちたいです。今は世界とか、そんなのじゃなくて自分ができることから一つ一つ確実にやっていこうって思うんです。きっとさっきみたいにいきなり

凶暴化した魔物が襲ってくるかもしれません。私はそれにも負けないくらい強い心がほしいんです」

アルスはそっぽを向くと、首をゆっくりさすった。そしてゆっくり口を開いた。

「決めるのは自分。頑張るのも自分。そして成すのも自分だ。後悔しない道を行けばいい。自分が正しいと思った道を行けばいい。間違ったと思えば、やり直せばいい。いいんじゃないか？ラミエルがそのやり方がいいってんならそれでいいと俺は思うぜ。」

アルスの一つ一つの言葉の重みに涙が溢れそうになったがぐっとこらえた。強くなると言ったばかりなのだ。もうむやみに泣いたりなんてしない。そして謝るより先に言わねばならないことがあった・・・

「ありがとうございますッ！」

部屋中に声が響く。アルスがクスっと笑った。ラミエルも小さく笑う。

アルスはいつも支えてくれる。それは人は一人じゃないと言ってくれているようで、安心する。人は互いに助け合って生きていかなければいけない。それは世の中がどんなになろうとそれは変わらない・・・。

いつの間にか身体の震えは止まっていた。そして夜は月明かりに照らされていた・・・。

◆

「昨日はお世話になりました」
「いいえ、また来て頂戴ね」
「ディモール今度来るときは俺の分もココア用意しておいてくれよ」
「はいはい」

笑顔でディモールが送り出してくれた。
服はディモールのものをもらった。動きやすく魔物と対峙しても身軽に動けそうだ。
歩きながら、前を歩くアルスが振り向く。

「良かったな。服、買いに行かなくてすんで」
「そうですね」

スタスタと前を歩くアルスにラミエルは追いつくのがやっとだ。少し、息を切らせながらラミエルはアルスの服の袖を引っ張った。

「アルスさん待ってくださいッ！一体どこへ向かうんですか？」

そういえば、各地の魔術増幅光（シルヴァンティア）を安定させる・・・とは言ったが具体的にどうするかまったく決めていなかった。言いだしたのは自分だ。アルスに聞いても意味はない。だが、アルスは歩くのをやめてまた振り返った。

「悪い、ちょっと寄りたいところがあるんだが・・・」

じっと見詰めてくる。たまらなく視線を逸らしてしまった。
「ど・・・どこですか？」
少しアルスはうつむいた。
「墓、作ってる途中だったんだ・・・」
「お墓・・・」
それは聞くまでもない。魔物(シード)退治の仲間の墓だろう。
ラミエルは小さく頷いた。
（誰が・・・一体誰が魔物(シード)退治の子供たちを・・・）
悲しみに包まれながら二人はまた歩きだした・・・。

The fifth story : 搗いた餅より心持ち（前書き）

皆さんおはようございます、こんにちは、こんばんは作者です。
中学校生活ももうすぐ終わろうとしていますが今夜はこのお話の専門用語を簡単にまとめたいと思います。冬休みきゃっほう＾ｐ＾
どうぞ物語を読む参考にしてください＾＾

魔術増幅光（シルヴァンティア）
世界の歪みの原因。濃度が異常に濃くなると、魔物や動植物に影響を齎す。
空気中に存在する酸素に宇宙空間から降り注ぐ魔光（ヴァルト）が化合することでできる物質。生活の支えだが使い方を間違えれば危険なモノとなる。

魔術増幅石（シルヴァンティアル）
特殊技術でつくられた貴重なもの。アルスが持っている。魔術増幅（シルヴァンティア）光の比でない力を秘めている。使うと身体に大きな負担がかかる。

光制輪（エルメティア）
唯一、魔術増幅光（シルヴァンティア）と魔術増幅石（シルヴァンティアル）を制御できるもの。たがその効果は一時的なものである。魔術増幅石（シルヴァンティアル）よりも貴重なものでこれを所有するものは世界に指で数えられる程しかいない。

魔光（ヴァルト）
宇宙空間から降り注ぐ謎の物質。

魔物退治（シード）
構成員が全て子供の組織。世界中の魔物を退治していたが、今では生き残っているのはアルスのみ。とても戦闘力が高い。

ラミエル・オルヴィア
ヴァローン城の王女。魔術増幅光（シルヴァンティア）の暴走をくいとめるため旅をする。一途で温厚。

アルス・リベリオン
元、魔術退治（シード）の最高責任者。一時、仲間を失った感情に任せヴァローン城を襲撃した。武術や剣術を得意とする。魔術もつかえる。今はラミエルと旅をしている。

メルヴィン・カノン
城の衛兵。アルスの旧友。

ディモール・カノン
メルヴィンの姉。気前の良い素敵なお姉さまタイプ。今は港町のマルティネスで宿屋を営む。

ウィルド・ダルシアン
ヴァローン城に仕える医者。ラミエルの良き理解者。

それでは本編をどうぞ。

The fifth story : 搗いた餅より心持ち

「あの魔物はもともと大人しくて普段は森の奥にしかいないんだ」

「え？」

唐突な言葉にラミエルは歩みを止める。先日、ラミエルは突如現れた魔物に襲われた。怪我さえしなかたものの魔物の恐ろしさ、危険性を身を持って感じた。そして何より精神的なダメージが大きかった。魔術増幅光（シルヴァンティア）によって人が住む町中にも当たり前のように魔物が潜んでいること。そして自分は人に助けてもらわなければいけないほど弱い存在だったということ。認めざるを得なかった・・・。悔しさだけが心に残った。

アルスも立ち止まり、ラミエルと向き合う形になった。

「俺が魔物（シード）退治だった頃より圧倒的に自我を持つ魔物が増えてきた。厄介だ。あの宿にいた魔物は簡単に倒せる相手だったから良かったものの・・・。それに最近では光制輪（エルメティア）をめぐって各地で戦争が起きてるらしい。魔術増幅光（シルバンティア）さえ安定すれば・・・」

ラミエルはアルスの胸元に下がっている魔術増幅石（シルヴァンティアル）を見詰めながら話を聞く。アルスの強い光を持った瞳を直視することができないからだ。彼の瞳の色はまるで何もかも見通すような青だ。その瞳は青い空を、広い海を思わせる。

「・・・？ラミエル聞いてるか？」

顔を覗きこまれる。慌ててラミエルは一歩退いた。真面目な話をしているというのに心のどこかで呆けていた。

「ごッ、ごめんなさい！ちゃんと聞いてます」

顔を勢いよく上げるとそこには見慣れない景色が広がっていた。昨日とは少し違うがここはまだマルティネスだということがわかる。波の音がまだ近くで聞こえるからだ。

辺りを見るとそこには服がすりきれた子供たちがたくさんいた。ここは一体・・・。

「ここはスラム・・・みたいだな」

ボソッと呟くようにアルスは言った。

「スラム・・・」

ラミエルは両手を胸の前で祈るように組むとアルスの言葉を復唱した。胸が痛かった。城の外では貧しい人たちが苦しい思いをしながら生活しているというのに、自分はなにもできない。魔術増幅光（シルヴァンティア）がたとえ安定してもこの状況は変わらないだろう。富を有するものは金にまみれ、そして富なきものは生きることも困難になる。どうにかしたいが何もできない。ラミエルはただ地面をじっと睨みつけることしかできずにいた。

「治安がいいのはマルティネスのほんの一部だけなんですね・・・」

子供たちがこちらをじっと見つめている。まるで睨むような目つきだ。

小さな足音が近づいてくる。素足が地面につく音。振り返ろうとした瞬間背中に鈍い痛みが走った。

ドンッという音がしたかと思うと地面が目の前にあった。どうやら誰かに体当たりされたようだ。背中をおさえながら立ち上がろうと

する。さっき聞こえた足音が遠ざかる。

「大丈夫か！？なんだあの子供」

「えぇ、大丈夫です・・・」

ラミエルはアルスを見上げた。なんだか身体が妙に軽い・・・。

（あら？なんだか腰のあたりが軽い・・・）

腰に手をやるとそこにはあったはずの旅の荷物が全部入っていた鞄がなくなっていた。

「嘘ッ！さっきの子に鞄をッ！」

驚いて前方を見るとそこにはラミエルの鞄を抱えた少年が立っていた。少年は皮肉たっぷりに微笑むとスラムの奥へと逃げて行った。慌ててラミエルは立ち上がる。

「ちょっと！待ちなさい！！」

ラミエルは叫んだ。

そして反射的に身体は走り出していた。後方でおいッ、とアルスが言ったような気がしたが気にせず少年を追った。まったく知らない場所をラミエルは無我夢中で走り回った。後ろからアルスが追ってくる。とても速い。まるで彼は風を切るように走っていた。

「あの子供捕まえた方がいいか？」

アルスはラミエルに追いつくとそれだけ言った。

ラミエルは大きく首を振った。だんだん自分のスピードが落ちてく

る。だが大きな声で返答する。

「私があの子を捕まえて荷物を返してもらいます！」

プライド・・・と言えばよいのだろうか。まず自分ができることから・・・。自分の問題は自分で解決したい。我儘ではあるがラミエルにはこれしかできない。了解、と小さくアルスは呟くと強く地面を蹴った。そしてあっという間に屋根の上に上った。なんという身体能力だ、とラミエルは改めてアルスを見上げた。

前を走っていた少年がふっ、と視界から消えた。建物の中に入ったようだ。

「どこ！？」

狭いスラムを抜けた。いつの間にか海の波の音は消えていた。

そしてそこには大きな屋敷があった。耳を澄ませるとその建物のそばからは多くの子供たちの声が響いていた。静かに屋敷の大きな門から中を覗くと屋敷の庭にはたくさんの子供たちが竹刀を握り、剣の稽古をしていた。遠目から見ればチャンバラのようだが真剣な表情で子供たちはそれをやっていた。そして目を凝らすとその中に混じって自分の鞄を盗んだ少年もいた。彼は竹刀を握っておらず手にラミエルの鞄をぎゅっと握りしめていた。庭の奥には一人、男が無造作に寝転がっていた。

ひゅっ、と後方で屋根からアルスが飛び降りる音がした。着地の音は驚くほど静かだった。そして静かにアルスは歩み寄ってきた。

「鞄・・・どうすればいいかしら」

息を切らせながら困ったようにラミエルは首を傾げた。
ちらりとアルスを見るとアルスは俯き考え込んでいるようだった。
そして少しすると決心したように顔をあげた。そして一歩前へ出て大きく息を吸った。

「こんにちはーッ！」

大声でアルスは叫んだ。そのあまりの声量に隣に立っていたラミエルは耳鳴りを催した。剣の稽古をやっていた子供たちの動きが一斉に止まる。そして皆、こちらに視線を集中させた。そしてしばらくしないうちに庭の奥で昼寝をしていた男がゆっくりと身体を起こしこちらに向かってきた。そして男は門の前までやってくるとまだ眠そうな顔をこちらに向けてきた。

「お？兄ちゃんかっこいい剣持ってるね。うちの門下生になりにきたの？」

見た目、３０代前半といった感じの無精髭を生やした男は目を輝かせながらアルスの剣を見詰めている。子供たちもその男の後ろからこちらに近づいてくる。

「先生ーッ！この人うちの新しい門下生？女の子じゃん」
一人の子供がアルスを指さしてそう言った。アルスに怒りの表情が浮かぶ。ラミエルは思わずクスッ、と笑ってしまった。

「先生そろそろオレたちになんかかっこいい技とか教えてくれよー。毎日竹刀振ってるだけなんてつまんないよー」

ぞろぞろと男の周りに子供たちが群がる。

だがラミエルの鞄を持った子供だけはこちらに近寄ってこない。警戒するようにこちらをじっと見ている。その姿を見てラミエルはアルスを押し退けて、ずいと前へ出た。そして門を挟んだ向こう側にいる先生と呼ばれる男に面と向かった。

「あの！鞄・・・返してほしいんですが」

ラミエルは口ごもってしまった。男は一体なんのことだ？というような表情をしている。一体どう事情を説明すればよいのか・・・。言葉を選んでいるうちにアルスが耳打ちしてきた。

「とにかく中に入れてもらって事情を話そう」

なんとも単純な話だ。ただ素直に事情を説明して鞄を返してもらえばよいこと。何故そんな簡単なことに気付かなかったんだろう・・・とラミエルはアルスの言葉に静かに頷いた。

「あの、お話があるんですがいいですか？」

ラミエルはそう切り出した。男はおいで、と手招きして屋敷の大きな門を素手で開けた。見た感じでは標準的な体系に見えるのだが以外に筋肉質なのかもしれない。

「うちのヤツがまたなんか仕出かしたか・・・」

男は庭に一人ぽつんと立っている少年を見詰めながら呟いた。少年はラミエルの鞄をまだ抱きかかえている。まるでそれに縋(すが)るように・・・。

屋敷の中はとても広く、独特な造りをしていた。本で読んだことがある。これは確か畳というものだった気がする。ラミエルそれ特有

の香りを楽しんでいると急に男は立ち止まり、横手にある部屋へとアルスとラミエルを促した。そこはヴァローン城の一室のように広々としていた。どうやら客間の様だ。椅子に座ると男はその部屋から見える庭を眺めていた。

「あの・・・私はラミ・・・」
言いかけて口を噤(つぐ)んだ。むやみに自分の名前を出してはいけないのだった。

（どう名乗ればいいかしら。ラミ・・・エル・・・ラ・・エル、そうだ！ラル！）

「私はラルと申します。こちらにいるアルスさんと旅をしているのですがその道中、鞄を落としてしまって・・・。その時、親切な少年が拾ってくれたようで町の人の話を頼りにここまで来たんです」

どんどん偽りの言葉が口から出る。
アルスは隣で頭を抱えるような仕草を一瞬した。
すると正面に座っていた男はふッ、と笑った。

「ふふっ。大人に嘘ついちゃいけないよお嬢ちゃん♪」

男は白い歯をニッ、とこちらに見せる。全てお見通しの様だ。男は続ける。

「おいちゃんの名前はスカル。スカル・ヴェール。ここで身寄りのない子供たちの面倒を見ている。この辺りはすごく治安が悪くてね。危険だし、皆苦しんで生活してる。生きるために皆必死さ。おいちゃんが若かったころなんてこの近く歩っただけで金を掏(す)られるほどだったのよ。」

スカルと名乗る男は笑いながらそう言う。

「俺はアルス。アルス・リベリオンだ。訳あってラミ・・・いや、こちらにいるラルと一緒に旅をしてるんだ。急ぎの旅で・・・まぁ、あの言いにくいんだが・・・」

「さっき・・・鞄とか言ってたね。様子をみるとうちの者(もん)がそちらさんのモノ取っちゃったのかな？」

はい、と申し訳なさそうにラミエルは頷いた。アルスも同様に頷く。

「はぁ・・・何度言えばわかるのか。悪いね。今、そいつ呼んでくるから」

スカルはゆっくりと椅子から立ち上がった。そして頭を掻きながら廊下へ出て行った。出ていく瞬間スカルは、アルス・リベリオン・・・と呟いたような気がした。

二人きりになって沈黙が訪れた。そっとアルスの顔を窺う。アルスは部屋の隅に飾られていた写真立てをじっと見つめていた。その写真にはたくさんの子供たちが写っていた。立派な服に身を包んでいる。手前に立っている少年の顔がスカルそっくりであった。とても凛々しい顔つきをしている。

「魔物(シード)退治の紋だ」

隣で上手く聞き取れないほど小さな声でアルスは呟いた。

アルスは写真を見ていたのではない。写真立ての独特な模様をみていた。それは本で見たことがあった。そう、魔物(シード)退治の紋だ。翼の

はえたドラゴンが対になって大空を飛んでいる模様は一度見れば忘れない。アルスの表情は驚いている、というより喜びに満ちているような表情だった。

ガタンッと廊下で音がした。スカルが鞄を盗んだ少年を引きずって連れてきた。

「こらッウィル！ちゃんとこの人たちに謝らんと今夜はご飯抜きにするぞッ！」

少年はスカルの手から逃げようと必死である。だがスカルは手の力を緩めない。それに反抗するような眼差しを向けた後、キッと今度はラミエルとアルスを睨んだ。

「なんでだよ先生！オレ知ってるんだぞ！先生が政府のヤツらに脅されてここから出られないの！だからオレが少しでもお金稼がないと・・・ここで皆で暮らせなくなっちゃうじゃないか！」

「ウィルッ！なんでそれを・・・」

スカルは怯んだように手の力を緩めた。そしてスカルはウィルを睨むように見据えた。

ふぅッ、と息を吐いてアルスは立ち上がり睨み合ってる両者の間に割って入った。

「まぁまぁ、落ち着いて。こっちとしてはラ・・・ルの鞄を返してもらえば問題ないんで」

まだ呼び慣れぬ名前をアルスは口にする。

ウィルはムっとしたような顔をしたがもう一度スカルに睨まれると観念したように奥の部屋からラミエルの鞄を持ってきた。武器や旅

の資金、その他に生活の必需品がすべて詰まっているこれが無くなっては話にならない。安心して肩の力を抜いた。

そして申し訳なさそうにスカルが笑顔をつくった。

「兄ちゃん、嬢ちゃん迷惑かけたな。礼と言っちゃなんだが今日は屋敷(ここ)でゆっくりしていってくんねえかい？おいちゃんこのままじゃ申し訳が立たないよ。何もないけど御馳走するよ」

ペロッと舌を出しながらいう。その仕草がなんとも幼く見えた。旅は一刻を争うのだが、各地の魔術増幅光(シルヴァンティア)の情報も欲しいのは確か。今日はここで世話になることになった。

子供たちに囲まれてアルスの長髪は玩具と化していた。眠そうな顔をしながらも子供たちの相手はしっかりしている。その光景がなんとも微笑ましい。子供の相手をしながらアルスはこちらに視線を送ってきた。

「ラミ・・・じゃなかったラル。俺スカル（あのおっさん）に話があるからちょっと子供(こいつら)の相手しててくれ」

すっと立ち上がると一つにまとめていた髪の毛をほどいた。サラリと髪が流れる。

「えっ！あのちょっとアルスさん！」

子供たちが標的を変えたようにこちらに突進してくる。

「きゃぁあ！アルスさんってば！ひどい！待って！」

前方を慌ててみるとアルスの姿はもう消えていた。

（してやられた・・・）

仕方なく子供たちの元気な笑い声に包まれながらラミエルは一緒にはしゃいだ。まるで時間を忘れるように・・・。

（アルスさん・・・スカルさんに話って何かしら。）

騒ぎ疲れ、天井を見上げていると幼い子供たちの温もりに抱かれるようにラミエルはそのまま目を静かに閉じた。

The sixth story : 負うた子に教えられて浅瀬を渡る（前書

アルス過去編です。内容はあっさりしていて、それでいてドロドロです。（笑）
表現変なとこまみれなのでわからないところがあったら気軽に言ってください。

The sixth story : 負うた子に教えられて浅瀬を渡る

軋む床の上を軽快な足取りで進んでいく。辺りはすっかり暗くなっていた。

風に紛れて時折魔物の鳴き声がどこからか聞こえてくる。大地を揺さぶるように低い声で鳴く。それは鳴き声ではなく音になってここまで響いてくる。ひやりと嫌な汗を掻く。ポチャン、と水の音がした。歩みを止め、視線を巡らせると庭の奥にある池の中で静かに泳ぐ小さな魚を視界に捉えることができた。アルスは黒光りする怪しげな水面に寒気さえ覚えた。

突然、背後に気配を感じた。
警戒しながらアルスは静かに腰に下がっている剣の柄を握った。

「兄ちゃん、こんな夜更けにどーしたのかな？」

調子抜けするほど明るい声が響く。
振り向くとスカルは壁に寄りかかりながら腕組みをして立っていた。
夜の静けさだけが辺りを支配する。口を開くまでに随分時間がかかった。

「話が・・・あるんだ」
「ん？何？」

微笑みながら首を傾げるその仕草はまるで親のようだ。なんとなく、スカルの雰囲気が昔の父親に被る。そう思うと嫌悪感に包まれた。
拳を強く握り頭を軽く左右に振った。

「あんた、魔物(シード)退治だったのか・・・？」

短い沈黙の後、スカルは閃いたように明るい表情をこちらにぶつけてきた。

「ああ！写真を見たのか！そうそう。おいちゃん短い間だけど魔物(シード)退治をやっててね。まぁ２０年も前の話しだがね。あの頃はまだ世界が平和で良かった・・・」

スカルはそれだけ言うと考え込むように瞳を閉じた。

アルスはその言葉を聞いて一歩スカルに近づく。

「それならあんた、ロディウス・・・ロディウス・リベリオンという男を知って・・・いるか？」

スカルと視線を合わせることができない。

本当なら父親の名前など呼びたくもない。だがもしスカルが父の存在を知っているのなら可能性はある。父が今どこで何をしているのか・・・。

スカルを見ると昔のことをまるで懐かしんでいるような表情をしていた。

「ロディウス・・・知ってるよ。あの男は本当に優秀な男だった。いつも前線で戦っていたよ。仲間のことをしっかり守り、そして少しでも犠牲を出さないために誰よりも最初に魔物を仕留めていた」

真っ直ぐにアルスを見詰めるスカルの視線は逆にアルスを苦しませた。

「スカル・・・その男・・・その男は今どこにいるか知っているか

！？」
「いや、退団してからのことは知らない。だけど噂で聞いたことがあるな。この国の政府を潰そうとしている組織があって、その組織をある男が牛耳っている・・・と。名を、ロディウス・リベリオンと」
表情を変えずにアルスは唇を軽く噛んだ。
次に何と言えばいいのか言葉が見つからない。長年恨み続けてきた父親。
（やはり・・・生きていたのか）
たくさんの感情が入り混じる。胸をズタズタに切り裂かれたような気分だった。生きていた、という事実だけでこんなにも怒りがこみ上げてくるなんて。自分の未熟さに嘆息する。
「聞きたいことはそれだけかな？」
まるでスカルは気遣う様に明るい口調で話しかけてくる。
心の奥底で眠る記憶がふっと溢れてくる。それはまだ優しかった頃の父の姿。自分をまだ道具としてではなく、人として見てくれていた頃のあの姿・・・。

◆

「行くぞアルス！父の剣を見事受け止めることができればこの剣をお前に譲ろう」
低く、威厳のある父の声と言葉にアルスは大きく頷く。

初めて見る父の強い眼差しと凄まじいほどの気合いに幼いアルスは怯む。
だがしかし負けぬ程の気合いをこちらからも飛ばす。初めて握る真剣を両手で構える。

「行きます父上！」
「来いッ！」

アルスは叫ぶと一気に踏み込んだ。父の剣が空高く掲げられた。振りおろされるまでの間、まるで時間が止まっているかの様な錯覚に陥った。
自分の剣を前に出す。ギリッと剣の柄の部分を力強く握りしめる。

（必ず受け止めてやるッ！）

ドンッと強い振動が剣の先から伝わってきた。重く、そしてビリビリと腕が痺れてくる。衝撃に耐えられず地面が陥没した。幼い身体に多大な圧力がかかる。
だが、それでもアルスの手の力が緩むことはなかった。
いつの間にか辺りは静まり返っていた。足下がまだぐらついているが父の姿はしっかりと確認することができた。視線を上げるとそこには大きな掌があった。

「よくやったなアルス」

頭をぐしゃぐしゃと撫でられる。父のテストに合格したのだ。
優しい声にアルスは安堵する。

（やった！これで父上も母上をボクを認めてくれる！）

６歳になったばかりのアルスの剣の腕はすでに父の剣を受けることができるほどのものであった。日々成長していく息子の姿に父は誇らしげであった。そして母もそうであった。それがアルスの誇りでもあった。強い父に、優しい母。理想的な家庭に恵まれアルスはどんどん剣の腕を磨いていった。

「アルス、ちょっとこちらへいらっしゃい」

剣の稽古中に母が話しかけてくるなど初めてのことであった。不思議に思いアルスは母の後を追う。母は家の奥から見たこともない首飾りを持ってきた。それは今まで見たことのあるどんな宝石よりも美しく輝いていた。

「母上・・・これは？」

「今日からあなたはこれを付けるの。絶対にはずしてはだめよ」

母は優しい手付きでアルスの首それをかける。

「これはきっとあなたの剣の力をより強くしてくれるわ。剣のことを何一つ知らない私が言うのもなんだけど、これを身につけてこれからもがんばりなさい」

優しい笑顔だけを残し母はアルスの元から去った。

それをつけてからは、母が言った通り剣の腕は確実に上がった。だがしかし時折、何もしていないのに疲労感に包まれることもあった。けれどそれは自分の未熟さのせいだと思いアルスは余計に自己鍛錬に勤しんだ。そのおかげで疲労感も徐々に薄れていった。

だが幸せな日々は続かなかった・・・。

アルスが１０歳になった頃――――――――事件は起こった。

「アルス。お前は今日から魔物(シード)退治になれ」

父の突然の言葉にアルスは首を振った。

魔物(シード)退治といえば、毎日のように死者がでる危険な組織。一日１０、２０人のペースで子供が死んでいる。基本的には聖の儀－１２歳になると行われる儀式－が終わってからでないと入れない。だがまれに聖の儀を行う前の子供でも戦闘力が高ければ入ることができる。

「父上！ボクはここで剣の腕を磨いて剣士になりたいんです！だから・・・ごめんなさい。魔物(シード)退治にはなりませんッ」

力強くアルスがそう言うと父の表情が冷たく凍った。

恐ろしい程の瞳にアルスは金縛りにあったように動けなくなる。

静かに父は口を開いた。

「そうか・・・実に残念だ。父はお前を認めていたというのに。お前なら、この父の言葉を素直に受け入れると思ったのにな。つかえん奴だったようだな。魔物(シード)退治にならないというのなら生かす価値がない。名残惜しいがお前には・・・死んでもらう」

それからのことはアルスはおぼろげにしか覚えていない。

あまりの恐怖に記憶が飛んでいるのだ。

だが所々なら覚えている。

父の剣から身を挺してまでアルスを守ろうとした母の凛とした背中。
母の鮮血に染まった自分の手。
怒りに我を忘れ、自分の剣を父の胸に突き刺したこと。

父はアルスを守ろうとした母を斬殺した。
母の温もりはもう覚えていない。
覚えているのは父のあの凍った様な目だけ。

母が残した言葉も覚えている。鮮血に染まりながら、息も絶え絶えに言った言葉。

「ごめんね・・・アルス。あなたは生きて、そして・・・」

言葉はそこで途切れた。母が最後に何を言いたかったのか定かではない。だけど何故か最初に出てきたのは謝罪の言葉。何に対してなのか。アルスはその事件から7年も経っているが今でも答えは見つからない。

昔から仲の良かったメルヴィンの家族がしばらくは金銭での面倒をみてくれた。
だが程なくしてメルヴィンの父が病気で息を引き取った。流行り病だった。

メルヴィンの母も半年もしないうちその病にかかった。一命はとりとめたがそれからずっと植物状態となってしまった。アルスはメル

ヴィンの姉に母からもらった首飾りが貴重な魔術増幅石（シルヴァンティアル）だと教えられた。それを知ってからアルスは剣だけでなく、魔術も勉強した。
その成長は著しいものだった。

そして自立し、自ら魔物（シード）退治へ入った。
これ以上メルヴィンの家族に迷惑はかけられないと思い立ったからであった。

事件が起こってからというもの、アルスは心を閉ざした。
誰にでも自分から距離を置き、自分を殺して生活をしていた。
アルスは大切なものを失う恐怖をまた味わうことから逃げていた。

アルスは魔物（シード）退治の中では一番戦闘力が高かった。自然と誰からも信頼され、尊敬されるようになった。だが本人はそれが嫌だった。

（魔物（シード）退治のやつらは人をつかえるか、つかえないかで判断しているのか・・・これじゃ父（あいつ）と同じじゃないか・・・）

彼らの尊敬に満ちた眼差しをアルスは拒絶した。
だけど、一人だけ尊敬の眼差しではなく一人の仲間として見てくれる者がいた。

その者の名はミリア。彼女はいつも活発で明るく、気を配るのが上手かった。
当時、アルスとミリアの歳の差は2歳。アルスは１４歳、ミリアは１２歳だった。
魔物（なかま）退治と打ち解けあうことができぬまま、４年が経とうとしてい

た。
魔術増幅光(シルヴァンティア)のせいで異常気象が続き、雪が降るはずのない温暖な地域でも積雪が観測された。
寒さが増し、魔術増幅光(シルバンティア)の濃度も増し息苦しくもあったある夜のことだった。
アルスは任務が終わって自室に戻ろうとしたときミリアに初めて声をかけられた。彼女はいつも魔術担当で前線ではなく大抵前線で戦っているものの援護をしていた。魔物(シード)退治で唯一、治癒術を使えるのも彼女だった。

「血が出てるわ・・・手当てしなくちゃ」

手からは淡い光が立ち上っていた。それは紛れもなく魔術増幅光(シルヴァンティア)だった。
漆黒の髪。きれいに切り揃えてある短髪はクセなく伸びている。肌は真っ白でまるで雪のようだった。触れば冷たいのではないかと思うほどそれは白かった・・・。

「放っておいてくれ」

突き放すようにそう言うと彼女は意地になったかのように詰め寄ってくる。

「何言ってるのよ！馬鹿なこと言ってないではやく見せて！魔物の毒気にあてられたら大変なんだからね！油断したらだめなのよ！」

ぐいっと強引に腕を引っ張られる。
魔物の血で真っ赤に染まった服を勝手にめくり治癒術をかける。治癒術を使えるのはその素質があるものだけだ。どんなに訓練しよう

と簡単にできるものではない。

（これが治癒術・・・初めて見た）

心の中でそう呟くとあっと言う間に傷は塞がっていた。

魔物に深く抉(えぐ)られた傷はきれいになくなっていた。

彼女の視線がすっと上がる。そして小さな声で話し始めた。

「私は・・・あなたが過去にどんな経験をしたのかわからないけどあなたの心の奥で見え隠れする闇が怖い。いつも他人と距離をとって、そして仲間を仲間とも思わない・・・何より自分を偽って生きているあなたが私は嫌いよ」

本当に、本当に小さな声で彼女は言った。俯いていて表情はわからなかったがきっと辛い顔をしている。そうアルスは思った。

「確かにあなたは強いわ。誰よりも強い。仲間を守ってしっかり行動しているとは思う。でもね・・・それだけじゃだめなのよ。もっと自分から心を開かなくちゃいけないの。私たちは仲間じゃなくて家族だから。毎日一緒に生活して、一緒に戦って、泣いて笑って苦しんで。同じ思いを共有している家族なんだから・・・もちろんあなたも私たちの家族なの」

ただ黙ってアルスはその言葉を聞いていた。

自分の手にミリアの手が重ねられる。温かかった。それはまるで優しかった母の温もりのようだった。忘れてしまっていた温もり。ミリアの優しい笑顔に心が和んだ。

「自分の悪いところを人に見られたっていいじゃない。あなたはあなただもの」

ミリアに諭されてようやく小さな光をアルスは掴むことができた気がした。

翌日からアルスの態度は少しずつだが変わっていった。そして何より笑顔を見せることが多くなった。ミリアとはどんどん親しくなり、なんでも相談しあう程親密になった。アルスはミリアを妹のように可愛がった。まるで本当の兄妹のように・・・。

魔術増幅光（シルヴァンティア）の濃度が増し、各地の魔物が凶暴化したため魔物（シード）退治は毎日のように各地の魔物を退治して回った。

「任務、御苦労様！」

ミリアとミリアの隊が出迎える。この頃既にアルスは魔物（シード）退治の最高責任者になっていた。

「おうッ」

誰にでも平等に接することができるようになったアルスは仲間を家族と呼ぶようになった。誰かが死ねば、任務先がどんなに遠くても自分の足で本拠地に戻って家族と一緒に死んだ家族を弔った。

「アルス、ホント変わったね」

突然ミリアが食事中に話しかけてきた。ニヤニヤしながらこちらを見る。

「なんだよ一体」

「だって前のアルス酷かった。冷静なのは今でも変わらないけど、すっごく刺々しい雰囲気がなくなって明るくなった。正直言って前のアルスは流石の私も近づきにくかった。自分を変えるって何よりも難しいと思う。それを簡単にするアルスがすごいと思う」

純粋な言葉にアルスは笑顔をつくって見せた。ミリアはずっとそういう顔してればいいのに、と呟いた。

またやっとアルスは平和を掴むことができた。
何があっても自分に素直に生きる。それが今自分にできること。

父が母を殺し、憎しみしか残っていなかった自分。
それで何が解決するのか。
考えてみればなにも解決などしない。

自分らしく、生きる。
母に恥じないように。
命をかけて守ってくれた母に恥じないような生き方をする。
もう逃げたりしない。

アルスはそう決心した。

どんな人の考えも、どんなことがあっても全て受け入れることができる器がほしい。
ここにいれば、もしかしたら母が最後に残した言葉の意味がわかるかもしれない。

今は自分を支えてくれる、仲間が、家族がいる。
何も心配することなどない。

そう・・・何も・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0249j/

Traveler of fate〜魔光創世伝〜

2010年10月9日16時23分発行